
幻 想 童 話

保地葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想 童話

【Nコード】

N7124D

【作者名】

保地葉

【あらすじ】

童話パロディ。微エログロ、差別的表現がありますので考慮ください。

紅帽子（前書き）

「赤ずきん」より。

紅帽子

あるところに朱帽子を被る少女がいた。

少女は母に用事を託され祖母の家に行く途中に暴行されその際流れた血が少女の衣服に染み込みその布を用いて祖母が朱帽子を縫ったのである。少女の村に古くから伝わる風習だった。

朱帽子を被る者は村人と口をきくことは出来ない。朱帽子たちは朱帽子を深く被り伏目がちに歩いた。朱帽子の者たちはこの村を出ること無く死んで行くのである。

朱帽子の少女は母の言い付けで毎日祖母の家を訪れた。母は汚れた娘を罰していた。言い付けを守らせることで村人の目に娘を触れさせ、辱めていたのである。

娘は錠通り母とも祖母とも口をきかず毎日村を歩いていた。

閉鎖された村に旅人が訪れた。旅人は人懐こく様々な事を訊いて回る。朱帽子のことも聞き及び、偶見掛けた朱帽子の少女に声をかけた。

朱帽子の少女は困惑したが、旅人が村人で無い事を知るとしばらくぶりに口を開いた。朱帽子の少女はゆっくりと言葉を紡ぐ。旅人は朱帽子の少女を気に入った。

朱帽子の少女と旅人は頻繁に会う仲になったがそれを良く思わないのが少女の母である。

母は少女を罰していたのに少女は日に日に朗らかになっているのを見、旅人を邪魔に思った。母は少女の父に相談すると父はならば旅人を亡き者にしてしまえばいいという。母はなるほどと納得し早速旅人の飲み物に毒を盛ったのだった。

母に旅人への飲み物を託された朱帽子の少女は、母の明るい表情を見て訝しみ飲み物を父の杯に注ぎ渡した。

父は知らず杯を飲み干し血を吐いて倒れた。父の鮮血を受けた朱帽子の少女は衣服を赤く染めたまま旅人の元へ走り今までの事を告げた。

話を聞いた旅人は朱帽子の少女の母の元へ急ぎ母を刺す。そして朱帽子の少女を連れその場を後にする。

旅人と少女は赤い衣服のまま村外れの朱帽子の少女の祖母の家を訪れた。

少女の祖母は何も言わず二人の赤い布で二つの朱帽子を縫った。旅人と少女は揃いの朱帽子を被り村を出たのである。

その村は未だひっそりと朱帽子を縫い続けているという。

紅帽子（後書き）

HP（携帯推奨サイト）で公開中。

ハロメ、笛吹き女（前書き）

「ハーメルンの笛吹男」

「サロメ」より

ハロメ、笛吹き女

ハロメは村唯一の娼婦である。口淫を得意としたので称讃と侮蔑から笛吹き女と呼ばれていた。

ハロメは村一番の嫌われ者である。しかし夜も昼もハロメの元を訪れる客は絶えなかった。

ハロメはいつも美しくしていた。豪華な衣装で着飾るのではない。高価な化粧を施すのではない。ハロメは家の裏から湧き出る水を飲み、身体を清め、衣服を洗った。ハロメの内に入った水はハロメを輝かせ、外を拭った水はハロメを瑞しくした。濯がれた衣服は光沢と陰影を持ち、ハロメを美しくしていた。

ハロメは笛吹き女だったので、村中の女たちから嫌がらせを受けた。ハロメに食物を売る女は無く、ハロメに唾を吐く女は多い。時にハロメは飛礫を投げられたが、ハロメの美しさは虐げられることはなかった。ハロメの態度は毅然としたままであり、食物はハロメの客たちが少量ながらも持ち寄ったために飢えることはなかった。

ハロメは有償の愛を男たちに与え、男たちは伴侶では得難い悦楽を得る。しかしハロメは男たちに安楽を与えることはない。それが男がハロメから離れられない理由であり、また、男がハロメに一定の距離を置く理由だった。

村中の男がハロメに惹かれたことに無理はない。ハロメは娼婦でありながら淑肅としていたのである。

ハロメは何人かの男の子を身籠もったことがある。月が満ちハロメは子を産み、村の寺院に預けた。

ときに子は村の夫婦に養子として引き取られる。子の養父はハロメの客であつたりする。

ハロメの子は村の男たちによって出自は伏せられていたので、ハロメの子たちは養父母の元で健やかに育った。

ハロメは美しい笛吹き女だったが、それでも年老いてくる。ハロメの最後のこどもは未だ赤子だったが、最初のこどもは成人していた。ハロメは客取りを少しずつ抑え、ゆったりとした生活を送ろうとしていたが、村の女たちの嫉妬がそれを許さない。

貯蔵庫は荒らされ、湧き出る水を澱まされ埋められた。その度にハロメは貯蔵庫を建て直し水の湧き口を整備したが、女たちの悪意にハロメの仕事は追いつかない。年輪を重ねた体は体力を失いつつあった。

安寧を求めるハロメは、村の首長の元へ訴えに訪れる。

村の首長は好色だった。何人もの妾を抱えていたが、ハロメには手を出したことはない。女は買うものではない、貢ぐものでもない。財力と権力、器量が首長の自信を作っていた。

村の娼婦が訴え出たことに首長は眉をしかめたが、役目として謁見し、一目で欲望が動いた。ハロメが何一つ言わないうちに首長は願いを聞き届ける条件を出す。すなわち、一夜を共にしろと。

ハロメは無表情のままに踊るようにヴェールを翻し立ち上がった。年を経たとは思えない軽やかさで首長に歩み寄る。

七つのヴェールを脱ぐとき、首長は既にハロメの虜になっていた。ハロメは水のようにとくとくと湧き、しつとりと首長を包んだ。ときに拒み、ときに漂った。首長はハロメのつかみどころのなさに溺れた。

一夜明け、首長はハロメに願いを聞こうと申し出る。ハロメは言う。安穩とした日々を、と。

首長は願いを聞き入れ、ハロメの家に守衛護衛としてひとりの青年とひとりの娘を遣わす。それは期せずして、ハロメの子らであった。

ハロメはこどもたちに母と名乗り出ることはなかったし、こどもたちが母と呼ぶこともない。力仕事をした彼の足をハロメが濯いだが、それが性的に発展することはなかった。ハロメの元に時折客が訪れ

たが、彼女が応対することも求められることもなかった。

ハロメは一日に二度、茶を淹れる。それは香り高く柔らかに苦味を感じた。

それはわずかながらの安穩の日々となる。

村の女たちはハロメの安穩をよく思わない。首長の女もそうだった。ハロメに心を奪われた首長を見、ハロメへの嫉妬心が高まる。

ある晩、ハロメは幾人もの覆面の女に襲撃される。

守衛と護衛をしていた男は、覆面の女に首筋に刃物を沿わされながら命が惜しければ共にハロメの元で働いていた娘を犯せと言われる。娘は明らかに、ハロメに似ていた。ハロメの元で過ごすようになってからは特に美しさが際立っていた。

ハロメは女たちに押さえ付けられながら、息子が娘を汚す場面を見せつけられた。女たちは彼がハロメの息子だとは知らず、ただハロメの娘を傷つけることでハロメの心を抉りたかった。彼は死ぬことへの恐怖とハロメへの嫉妬が勝った。目の前にいるハロメに似た美しい娘を汚すことへの欲求があった。娘はハロメへの憎しみが増えた。

鬼神のように暴れ抗うハロメの前で行為は終わる。気力体力ともに果てたハロメは、終にぼそりと真実を口走る。

事実を知った覆面の女たちは恐れおののき逃げ帰る。残ったのはハロメと息子と娘である。

ハロメは呆然としていた。

これは報いなのだろうかと考えていた。娼婦とし笛吹き女として過ごした報い。子を宿しながらも母として育てなかった報い。

だけれどもこどもたちに一体何の罪があるつか。

ハロメはゆるゆると立上がり、娘を寝台へと運んだ。息子が言われるままに水を汲んで持って来た。ハロメは娘の体と息子の体を拭いた。水は二人の肌をすべらかにさせたが、二人の心を戻しはしないのだ。

こどもたちに一体何の罪があるうか。

…母の報いを子が享けたのだ。
では。

ハロメは鉈を手に取り、夜明けを迎えた村へ出た。ハロメは首を撥ねて回る。

男にも女にも手を出さず、ただこどもだけを撥ねた。その日の正午、村のこどもは皆死んだ。ハロメは踊るように崖から身を投げ死んだ。

こどもを失った村はすぐに寂れ、村人は次々に姿を消す。一年後、村に住むのは一組の父と母とこどもだけである。

誰もいない村のはずれの粗末な家で、若い父母が茶を飲んでいる。ひとりのあかごが母の腕に抱かれ眠っている。家の裏で水だけが変わらずにこんこんと湧いている。

ハロメ、笛吹き女（後書き）

HP掲載済み

ヘルゼンとグレーテルン（前書き）

「ヘンゼルとグレーテル」より

ヘルゼンとグレテルン

ヘルゼンとグレテルンは月明りを頼りに宵闇を彷徨っていた。

ヘルゼンの落とした砂金粒は波にさらわれ見つかるわけもなく、長く入組んだ海岸線をどこへ行けばいいのか見当も付かない。

その上グレテルンが泣き続ける為にヘルゼンの苛立ちを一層助長し、方向感覚を鈍らせるのである。

果たして家に帰れるのだろうかとヘルゼンは不安になる。一度は帰り着いた家路だが、今はただ目印を失い彷徨うばかりである。

それもこれも、グレテルンが悪いのだ。

ヘルゼンはそう思ったが口には出さない。

この状況では一人より二人のほうが得策である。

利用出来るものは利用するだけしてから削除すればいい。ヘルゼンは口には出さない。

ヘルゼンはなんとか前回辿った道を探し当てようとしていた。そこにはまだ貝殻の目印が残っているはずである。

あの母王が回収していなければの話だが。

ヘルゼンは嫌な考えに首を振る。ヘルゼンは聡い少年だったのでありとあらゆる可能性を思い浮かべることが出来た。

いや、母王はそこまで頭が回るまい。母王は自分の命だけが惜しいのだ。

己の考えを打ち消しヘルゼンは泣き続けるグレテルンを背に歩き続ける。

ヘルゼンとグレテルンは父王と母王の間に産まれた兄と妹だった。もしかすると姉と弟かもしれない。自分の出自の順についてヘルゼンは尋ねたことはない。グレテルンは疑問にすら思わない。精神的成長を鑑みればヘルゼンは兄でグレテルンは妹だった。

父王と母王はそれぞれがそれぞれの国を持つ王族である。父王の伴

侶である妃には父王の後継である男子が居、母王は伴侶である国主との間に後継として男子を産んでいた。父王と母王は互いに敵対する国でありながら密通し、ヘルゼンとグレエテルンを産んだのである。

どちらの国にも居場所が無いヘルゼンとグレエテルンは、国都から遠い岬にある王族の別荘に何人かの奉公人と父王と母王からの心ばかりの金で住んでいた。

あるとき母王は二人が住む別荘に住みたくなり、ヘルゼンとグレエテルンを追い出すことにする。父王は反対したが、母王は二人にそれ相応の金子を持たせれば良いだろうと押し切った。二人を慮った父王は何でも二人の欲しいものを与えると言ったがヘルゼンとグレエテルンは今まで通りの暮らしをと望みいやそれ以外のものならばと父王が言いならば、とヘルゼンがとても無茶な望みを言った。

それを聞いた母王は青褪め、ヘルゼンを珍しいものを見せてやると連れ出し見知らぬ場所に置き去りにした。

こんなこともあるのかと月明りを反射する貝を拾い集めていたヘルゼンは道すがらその貝殻を落とし、母王に置き去りにされてから夜を待ち月明かりを利用し貝殻を目印に家に帰って来た。

驚いた母王は再び甘言で持つてヘルゼンを連れ出そうとしたが上手くいかず、ならばとグレエテルンを使ってヘルゼンとともに連れ出し見知らぬ場所に置き去りにした。

ヘルゼンは前に連れ出され貝殻を目印に帰り着いたとき、グレエテルンにこういうことがあるだろうから目印になるものを集め身に付けておくように、と説いていた。しかしグレエテルンの用意したものは小瓶いっぱい砂金粒だったのである。

ヘルゼンは道すがら砂金粒を落としたが夜が暮れて月が出ても目印になることはなかった。

それでもヘルゼンは少しでも手掛かりを見つけようと、いつしか海の中に踏み入るまで探し続けているヘルゼンは膝辺りまで海に浸か

り目印となる砂金粒を探し、グレエテルンは泣きながらヘルゼンの後を付いて回った。

ヘルゼンは聡い少年だったが、グレエテルンは美しい少女だった。ヘルゼンは自分の聡さを知っているが故に一つの考えに没頭する節があり、グレエテルンは自分の美貌を知っているが故に何も出来ない少女だった。

ヘルゼンが夢中になって海を掻き回しているうちに高波が起こり、あ、と言う間もなく二人は波に吞まれ海へと引きずり込まれた。

次に二人が目覚めたとき、目の前には一軒のみずばらしい小屋がある。ヘルゼンとグレエテルンはふらふらと小屋に入って行く。

ヘルゼンとグレエテルンの前には豪華な食事の用意があつた。みずばらしい小屋は炊事場と洗濯場と掃除場と裁縫場だった。空腹だったヘルゼンとグレエテルンはそれぞれ無言で食物を口に運ぶ。そのとき小屋の窓から女が飛び込んで来た。

お前たちは誰だ何をしているのかどうしてここにいいのか何を食べているのだ。

と問いと怒りを同時に話した。

あなたこそ誰なの、とグレエテルンは問い返したところ、

自分の名も名乗らずわたしの名を訊くのか断りも無く人の家に侵入し勝手に食事を摂りそれを謝罪する事なくわたしの名を訊くのか。

と女は怒りに言葉を紡ぐ。

黙り込んだグレエテルンに代わり口を開いたのはヘルゼンである。

本当に申し訳ない、僕はヘルゼンでこちらはグレエテルン、こういう事情で波に吞まれ気がついたらここに居た、あまりにも空腹だったので料理を食べてしまった、謝ってすむ話ではないが食べてしまった分は労働でも何でも償いをする。

とヘルゼンは丁寧な謝罪した。

誠意を尽くしたヘルゼンの言葉に怒りを露にしていた女も落ち着きを取り戻し、それは気の毒なことですからここに辿り着いたのは幸運でした、と穏やかに言った。

女の変り様にグレエテルンは機嫌を損ね、ヘルゼンはこの場を繕う最善の方法について考え、ヘルゼンはグレエテルンに女に謝り損害を償うことを申し出る様説いた。

しかしグレエテルンはこんな身分の分らない女に頭を下げたくはない。自分は二つの王族の血をひく娘なのだ。グレエテルンには高慢な自尊心があった。

女は二人の様子を見、溜息を付いた。

美しい子グレエテルンあなたには何を言っても無駄な様ですね、聡い子ヘルゼンあなたに償いの為に旦那様の元で働いて貰いましょう。

と女は言う。

わたしは旦那様に仕える者です、あなたが食べた食事は旦那様のもの、夕餉を運ぶ際にあなたを旦那様のところへ連れて行きましよう、旦那様の元で償いをなさい。

と女は提案する。

ヘルゼンはそれで解決するならばと承諾し、グレエテルンはヘルゼ

ンと離れることだけを不安に思っていた。

その夜グレテルンは一人みすばらしい小屋に残された。ヘルゼンは女と出て行ったまま帰って来なかった。

グレテルンは小屋を回り炊事場に残された料理をしぶしぶ口に運ぶ。裁縫場と洗濯場から柔らかく綺麗な布を集めると小屋の中央に敷き詰め寝台にした。一糸纏わぬ姿になるとグレテルンは眠りにつく。

グレテルンが目覚めたのは夜も白む頃、女の怒声であった。

女はグレテルンに何をしているのだと叫んだ。

それは旦那様の衣服に寝具の布であるお前の寝具ではない。

グレテルンはわたしの寝具が無かったのだもの、仕方なく借りたのよ、それともわたしに床で寝ろと言うの、と苛立った。

美しい子愚かな子グレテルン、この家物はお前のものではなく旦那様のもの、お前は物を使うどころかこの家に入ることすら許されていない、自分のしたことの代償を払う気も無い愚かな子よここから立ち去れ。

と女に言われたグレテルンはわたしは二つの王族の娘、国にあるものは王族のものだわ、と言い返した。

女は荒立てた気性が落ち着くようにふう、と息を吐く。

美しいけれど愚かな子あなたは何も知らないのか知ろうとしないのか。

わたしはあなたがたについて少し聞いたことがある、と静かに語り始める女の話をもだき立ちを納められぬままグレテルンは黙って

いる。

岬の屋敷に住む少年と少女の話、人々と接点を持たない何人かの奉公人がおり、極たまに貴族らしき人が訪ねて来る屋敷、それがあなただたのことでしよう。

と女はグレエテルンに言った。そうよ、わたしは王族の娘だわ、と言うグレエテルンに、

美しいけれど愚かな子あなたは何も知らない知ろうともしないので
すか、知るべきことすらもならばあなたには旦那様の元にいる資格
がない早々に立ち去りなさいさあ早く。

と女は続けた。

何を知らないというのは、とグレエテルンは訊いたが、美しいけれど愚かな子知るべきことすら分らないのですね、と女の力は強くグレエテルンは小屋から出されてしまう。グレエテルンは小屋の扉を叩いたが開く気配はない。仕方なくグレエテルンはヘルゼンの名を呼びながら辺りを歩き始めた。

しかしヘルゼンは現れるはずもなく、力のないグレエテルンは砂浜に疲れて座り込む。グレエテルンは氣力を無くし飲まず食わず眠らず何もせず座り込んでいた。

どれほど座り込んでいただろうか、グレエテルンは笑い声を聞いた。声はヘルゼンのものである。

グレエテルンはふらふらとヘルゼンの声へ歩く。途中足をとられ転び砂だらけになりながらグレエテルン行く。

笑い声はヘルゼンのものだけでなく複数あった。たくさんの少年と少女の声が遠く遠く聞えて来る。

ああ、ヘルゼン、待って。グレエテルンはそう言ったはずだが出た

声は嘎れた掠れ声だった。ヘルゼンの若く嬉しげな声とは全く違う、そのことに気付き愕然となる。

グレエテルンが自分の両の手を見ると傷一つない白魚の様であった手がぼろぼろと流木のように皺枯れている。どうして、とグレエテルンが呟いたとき目の前に屋敷が現れた。

グレエテルンは半ば這う様に屋敷に辿り着き、扉を叩く。応答し扉を開けたのはあの小屋の女だった。

女はグレエテルンを一瞥し、どうぞお引取りを、とだけ言い扉を閉めようとする。なんとかグレエテルンは扉に体を割り込ませ旦那様とやらに会わせなさい、と言った。

あなたには旦那様に会う資格はない旦那様に会えるのは秀でたものだけですと女は冷たく言い放った。

ヘルゼンは聡さに秀でていますがあなたは何にも秀でていない帰りなさいと女に言われ、ヘルゼンが聡いならばわたしは美しいわ、あなたも美しい子と呼ぶ様に、旦那様も美しさを気に入るわ、と言ったグレエテルンの言葉に女は美しさが一体旦那様の何の役に立つと言うのです、と嘲笑った。足の速きものは競わせればより速くなり旦那様の足となり働くだろう、料理の出来るものは日々旦那様の為に食事を作るだろう、賢き聡いものは競い学び合い旦那様の知恵となるだろう、しかし美しいものは旦那様の為に何か出来るだろうかいや出来はしないでしょう。

と言う女にグレエテルンはわたしは旦那様の為に子を授かることが出来るわ、と言い返した。

女はますます高く笑い、旦那様は子を為す要はない旦那様は唯一無二の永遠な方、と言った。

旦那様は性など持たず子孫など作らぬさあ立ち去れ愚かな子よそれとも自らが未だ美しいかこの鏡で見てみるか。

と言われグレエテルンは示された方向の鏡を見た。

風の音ともしれない悲鳴がグレエテルンの喉を付く。鏡に映るのは枯れ枝のような裸体をした傷だらけで目の落ち窪むの女である。グレエテルンは長く尾を引く叫びをあげながらも鏡から目を離せず、傍らで女が嘲りの笑い声を上げている女は言う。

美しかった子グレエテルンお前の場所はここにはない立ち去れ。

しかしグレエテルンは鏡から目を逸らせない。鏡の自分を触りわたしが、わたしがと呟き続けていた。

グレエテルンの傍らの女は愚かしい子、と呼び掛けるとグレエテルンは咆哮を上げながら女に飛び掛かった。気狂いしたグレエテルンは赤々と燃える暖炉に女と共に飛び込む。声上がるがすぐに静かになった。

屋敷で書物を読んでいたヘルゼンは声を不審に思い部屋を出、声があったと思われるところへ向かうが誰の姿も無く暖炉だけが静かに燃えていた。不思議に思ったがこの屋敷の主人に呼ばれ部屋に戻ろうとする。

しかしヘルゼンは呼び声に再び足をとめた。途端に暖炉が弾け気のせいだと思い直す。背を向け一歩踏み出した途端、暖炉から伸びた手がヘルゼンを掴み引きずり込んだ。

ヘルゼンの姿は炎に消え、屋敷の主人は新しい飯炊き女が一人要るようだ、と呟いた。

二つの敵対する王族の中に密通し不義の子をもつけた者たちがいた。不義の親たちは政争によって殺され、二人の子はいずこにいるか行方を知る者はいない。

波打ち際で砂金粒を拾い集める少年の姿を見たというものがいるがそれも定かではなかった。

ヘルゼンとグレットテルン（後書き）

HP掲載、加筆修正。

ちいのかぎとたからばこ

ちいはかぎっこです。

お父さんもお母さんもお仕事をしているわけではありませんが、ちい用のかぎをもっています。ひもを通して首から下げて、体育のとき以外は外しません。

ちいの友達でかぎっこはなんにんかいますが、ちいみたいな立派なかぎをもっているはいません。

はるくんのかぎはさきつちよがぎざぎざしていて、平らです。りかちゃん Manson に入る前にボタンをぴびって押すと、かぎがなくても開きます。

やつくんとしーちゃんとかえでちゃんのかぎを持ってません。

みんな、ちいのかぎをいいな、って言います。
かつこいいな、いいなって言います。

だって、ちいのかぎは大きくて重くて、かぎあなに入れるところがちよんちよん、とかたっぱだけに耳が出てるみたいな形をしているんです。

はるくんが言いました。

「それはたからばこのかぎだ！」

はるくんはゲームが好きで、ゲームの中にそんなかぎが出ていたのを思い出したのです。

けれどもちいは人さし指をくちびるに当てて、

「ふふふ。ないしょないしょ」

と笑っただけでなんのかぎかは教えません。

やつくんもしーちゃんもかえでちゃんも、りかちゃんもなんのかぎ
か知りたいな、と思っっていたんですけどね。

でもね、それはほんとうにたからばこのかぎだったんです。
それがわかったのは、ちいがいなくなっただけのことでした。

ある日、はるくんはお母さんにくろい服を着なさい、といわれてび
つくりしました。お母さんはあかるいいろがだいすきで、くろい服
はお父さんが着るだけでもいやなんです。

そんなお母さんがしんけんな声でくろい服を着なさい、とはるくん
にいました。はるくんはお母さんのいうとおりくろい服を着て、
お母さんにつれられてちいの家に行きました。

ちいの家にはやつくんもしーちゃんもかえでちゃんもりかちゃんも
いました。みんなくろい服を着ています。ちいの写真がくろいわく
の中に飾られています。ちいはいーつと歯をくいしばって、すこし
ぴんぼけでした。

ちいのお母さんじゃない、やさしそうなおばさんがはるくんたちに
「ありがとうね」と頭をさげました。ちいのお父さんじゃない、か
らだの大きなおじさんが「今日だけは静かにしてくれ」とそとにむ
かってさけびました。そとにはたくさん知らないひととたくさん
のカメラがいました。

はるくんはやつくんやしーちゃんたちとかえでちゃんのおうちに行
きました。かえでちゃんのお父さんがちいについていろいろ聞いて
来ました。

ちいのお父さんはどんなひとだったか、お母さんとは仲がよかった
か。はるくんたちはこたえられるしつもんにつたえました。

ちいのからだにはあざがあったりしたこと。ちいはたまにおうちに

帰りたくないといっていたこと。ちいはいつも笑顔だったこと。

たくさんのお話のあと、ちいが遠いところへ行ってしまったとおしえられました。

その日、りかちゃんは朝起きて、いつものとおり新聞をとりにいきました。ちいがいなくなっても朝は変わらずやってきます。りかちゃんはそれをかなしいな、と思いましたがりかちゃんにはどうしようもできないことでした。

マンションの入り口の郵便受けの新聞をひっぱると、かつん、と何かが落ちるおとがしました。りかちゃんはあしもとをみました。すると、かぎがひとつ落ちていたのです。

大きくて重くて、かぎあなに入れるところがちよんちよん、とかたっぽだけに耳が出るみたいな形をしているかぎでした。りかちゃんはあつといいました。間違いありません。これはちいのかぎです。りかちゃんは周りを見渡しましたが、だれもいません。マンションにはマンションにすんでいるひとと、新聞やさんと郵便やさんしかはいれません。ちいのかぎはどうやって来たのでしょうか。遠くへいつてしまったちいがきたのかしら？

けれどもりかちゃんのところだけにちいが来たのではなかったのです。やつくんとしーちゃんのところにはちいはたからのちずを置いて行ったのです。

たからのちずはやつくんとしーちゃんの机のなかにありました。ノートをやぶった紙に「たからのちず」とちいの字で書いてあります。やつくんのちずにはたくさんのおてんがうつてあり、しーちゃんのちずには短い線や長い線が引いてあります。

これはなんだろう？そしてちいはどうやってこれをいれたのかしら？

みんなで考えていらかえでちゃんが言いました。

「これはにまいをかさねるの！」

その通り、たからのちずをかさねると見覚えのある場所のちずになったのです。

「みんなでいってみよう！」

はるくんのよびかけでみんなはたからのちずの場所に行ってみることにしました。

たからのちずの場所には、これはたからのちずの場所なのでくいことはいえないのですが、ちっちゃな小屋がありました。ちいのたからのちずはその小屋をさしていました。

やつくんとしーちゃんとかえでちゃんとはるくんとりかちゃんは手をつないで小屋のなかに入りました。

やつくんが持ってきた懐中電灯をつけます。小屋なかは散らかっていて、ところどころ壁が壊れてそとが見えます。天井も壁も壊れてないところ、そこにいちまいのブランケットが置いてありました。

「これかな」

「これかな」

ブランケットは半分にあたまれていましたが、したになにかがあるようで少しもりあがっています。ここにたからがあるのかしら？とつてもどきどきです。

みんなはブランケットの端をもって、いつせいのつ、でひっぱりました。かえでちゃんの腕の中にすっぽり収まるほど、ちいさな木のはこがブランケットの下に隠れていました。

「まるでオルゴールみたい、あ、ここにかぎあながある」

はこを調べていたかえでちゃんがかぎあなを指差しました。りかちゃんがかぎをそろそろとかぎあなにいれてみます。

「ぴつたり！」

りかちゃんがかぎを回すと、かきん、とちいさな音がしました。

「あけてみる？」

「あける？」

「あけてみよう！」

そしてゆつくりはこを開けました。

（……あつい）

はこから透明なひかりがひとつ、とびだしてきました。ひかりがはるくんの体突き抜け、叫びました。

（いたい）

ひかりがりかちゃんを突き抜け、泣きました。

（さむい）

ひかりがやつくんを突き抜け、怒りました。

（おなががすいた）

ひかりがしーちゃんを突き抜け、呟きました。

（どうして）

ひかりがかえでちゃんを突き抜け、尋ねました。

ちいの声でした。

ひかりはぴゅんぴゅん飛び回り、その度にたくさんの声がみんなを突き抜けます。

あついよさむいよごはんがほしいよいたいよたたかないでうちへいれてなかないでやめてうわぁぁんいいこにするからなかないからだからだからだからだから。

みんなはつないでいた手をぎゅうつとにぎりしめていました。爪の先が白くなるくらいです。

ひかりがぐるぐる回って、みんなはよっぱらったお父さんに突き飛ばされたことやお母さんにデパートに置いていかれたことやずーっとずーっとまえお腹を空かせて泣いていたときへとへとに疲れたお母さんとお父さんに大きな声で怒られたことを思い出します。

けれどもそれよりもつらくてこわくてかなしくてどうしようもないちいの声がみんなの頭に響くのでした。

あついよさむいよごはんがほしいよいたいよたたかないでうちへいれてなかないでやめてうわぁぁんいいこにするからなかないからだからだからだからだから。

やつくんもしーちゃんもかえでちゃんも、はるくんもりかちゃんもだれひとり何も言えず泣きもせずくちびるをくいしばって、ちいのお葬式の写真のようにいーっとくいしばって立っていました。

どれくらいそうしていたのでしょうか。思い出とちいの声に押し潰されそうになったとき、透明なひかりがぼん、とはじけました。暖かい風がふわっと広がり、みんなの頬をなでました。ふっとくいしばっていた力が緩んだとき、みんなの中にちいのこえが響きました。

（でもね、ちいはおとうさんもおかあさんも、だいすき）

ばたん、とはこが閉まったとたん、みんなはいっせいに泣き出ししました。

うわぁぁん、うわぁぁん、と声を上げています。

かなしいのでもこわいのでもつらいのでもありません。

みんなは突き飛ばしたお父さんが慌てて抱き締めてくれたことや走って戻ってきたお母さんが抱き締めてくれたことやお父さんとお母さんのあいだですやすやねむったことを思い出していました。すると胸のおくからあつたかくなつて、次から次へと涙がこぼれるのです。

みんなは手をつないだまま、あつたかい涙が湧き続けるまま、ずっとずっと泣き続けました。

やつくんもしーちゃんもかえでちゃんもはるくんもりかちゃんも泣いて泣き続けていると、お父さんとお母さんが探しに来ました。お父さんもお母さんもびっくりして「一体どうしたの？」と訊ねます。

「ちい、は」

「おとうさんもおかあ、さんも、」

「だいすきだった!」

みんなはそれだけ言うと、お父さんとお母さんに抱き付ききました。みんなのうしろにふたの閉まったはこがひとつ。

それからどうしたかって？

みんなはもちろん、おうちに帰りました。はこはブランケットにくるんで小屋に置いておきました。あとでまた来よう、そう約束しましたがその小屋はすぐに取り壊されてしまったので約束はなくなっていました。

はこはどこへいったのでしょうか。一緒に壊されてしまったのかしら？

ちいのかぎをりかちゃんはなくしてしまいました。やっくんとしーちゃんもたからのちずをなくしてしまいました。大切にしまっておいたのにどうしてでしょう。どこへいったのかしら？

それでも、やっくんもしーちゃんもかえでちゃんも、はるくんもりかちゃんもちいのことばを忘れません。あつたかいあのかんじを忘れません。いつもふとしたとき、ちいの声を思い出しています。

ちいはいつも笑っています。

(でもね、ちいはおとうさんもおかあさんも、だいすき)

(ふふふ、ないしょないしょ)

(だからだからばこにしまっておくの)

ちいのかぎとたからばこ(後書き)

「パンドラの箱」より

虐待を許容する意図はありません。

アリス、1（不思議の国）

まあ、主人公の名前はなんでもいいんです。

確かに外見は可愛い女の子でしたが、少年ではないことをだれにも証明出来ないのですし。

生まれつき色素が薄いのでしょう、金色の髪に碧の眼をしています。怒るとすぐ赤くなる白い肌。唇も白いので乳母がいつもピンク色のリップバームを塗っていました。

水色のエプロンドレスにペチコート、白黒縞の膝丈靴下にエナメルローファーを履いています。

もちろん頭には赤いカチューシャ。

ねえあなた、お名前は？

「アリス。

でもママはベスと呼ぶしパパはリジーと呼ぶわ。ダニエルとジョーはエリーと言うし、なんだっていいのよ。

だから「今は」アリス。

My name is Alice, now!

ですって！

ですから、主人公の名前はアリスにしておきます。

今のところは、ね。

さてさてお話はここから。

アリスがうたた寝をしていると、白ウサギが駆けてきました。

白ウサギは白い毛並みに赤いお目め、黒いチョッキに丸めがね、手には懐中時計がひとつ。

「大変だ！遅れちまう！」

そんなことを言いながら二足歩行で走って行く。
アリスはびっくりしてまんまるになった目を、きらきらさせながら大きな声で問い掛けます。

「白ウサギさん！そんなに慌ててどこへ行くの？」

白ウサギは聞き耳持たず、
あんなに長い耳があるというのにね、
忙しそうに駆けて行きます。

アリスはもちろん、白ウサギを追いかけます。
だってアリスはウサギを追うものでしょう？

「物語の主人公みたいね！」

アリスは気付いてないみたいですが、みたい、じゃなくて物語の主人公なんですけど。

とにかく、白ウサギを追いかけたアリスはウサギ穴に飛び込みます。アリスが飛び込んだウサギ穴は、びっくりすることに井戸でした。

井戸！

アリスは頭からまっさかさま、底に向かって落ちて行きます。

「このままじゃ死んじゃうわ！」

真つ暗な井戸の先を見ながら、アリスは心の中で叫びました。

でもね、アリス。

ウサギ穴に落ちたアリスが辿り着く場所はひとつなのよ。

天国？そんなわけありません！

アリスが行く場所といえばひとつ。

落ちて行く感覚にアリスは気を失ってしまいました。

目が覚めたらびっくりするわね。きっと。

アリスは不思議の国の入口に着いたのです。

アリス、2（わたしをたべて）

さてさて、あなたはいつまでお眠りさん？

「うっん…叔母さま、シロアリはゴキブリの仲間なのよ…」

まあアリス！　なんて奇妙な寝言なの！

可愛いアリスならストロベリー・キャンディやホットチョコレート
を口にするべきだね。

そう思いませんか？

「うっん…あら、」

アリスは目が覚めたみたい。

ぱちぱちとまばたきをして背伸びをしたアリスは、周りを見渡して
びっくりしました。

「なんてごちゃ混ぜ！」

アリスが驚くのも無理はありません。アリスがいたのは柱時計、古
びた筆筒、クローゼット、螺旋階段、姿見、プラットフォームなど
なんだが一貫性のないようなものがごちゃごちゃ並んで（実際には
乱雑に）いるホールだったんです。

窓の向こうには海が見えます。綺麗な月夜！

「ええと、何をすべきなの？」

まあ、アリス、忘れちゃだめよ。

白ウサギを追いかけるんでしょう？

「そうそう。」

わかったわ。正しい出口を選べばいいのね!」

そうよアリス。お話は読んだことがあるでしょう?

「もちろん。確か、小さな扉よ。それも本当に小さな鍵が必要」

アリスが探すまでもなく、アリスの足元に小さな三本足のガラステーブルがありました。小さな小さな錆びた銅の鍵が載っています。あら、銅の鍵なのね。

「うーん、金の鍵だと思ってたけど」

アリスは鍵を取り上げて物語を思い出そうと腕組みしました。

「あー、もう。忘れちゃってるわ!」

アリスがお手上げ、とでもいうように両手を上げました。すると、小さな小さな鍵はすっとな手のひらを抜けて飛んでったのです。

「まあ!」

ぽちゃん。飛んでった鍵は窓の外。

さあアリス、どうしましょう。

小さな鍵は窓の外、泉のなかに落ちました。アリスは慌てて窓に駆け寄って、叫びます。

「泉さん、お願い、鍵を吐き出して！」

それは無理じゃないかしら。

けれども泉がふいに波打って、きらきらする女の人が見えました。

「あなたの落とした鍵はこの金の鍵、それともこの銀の鍵、それともこの錆びた銅の鍵？」

まあアリス。これはチャンスね。

「ええと…正しいのは…錆びた銅の鍵よ！」

「正直な人。あなたに金銀銅の鍵すべてをあげましょう」

わあ素敵。

「ありがとう！」

「ではさようなら」

ざぶん、と泉に女の人は消えました。
はねた水でアリスはびしょ濡れです。

「…まあ、鍵が手に入ったのだし、よしとするわ」

心が広いわね。アリスは金の鍵を手に入れました。あとは扉を見つけるだけね。

アリスはすぐに扉を見つけました。小さな扉はカーテめよ。

「クッキー…eat meを食べると小さくなって扉をくぐれるに
違いないわ。」

でも、クッキーとクッキーちゃん、どちらを食べればいいの?」

まあアリス、そんなことで悩むなんて!

「だって大きくなるかもしれないわ」

それはそうねアリス。でも早くしないと白ウサギに追いつけないの
よ。

「待って…クッキーには‘EAT ME’って書かれていて、クッ
キーちゃんは‘EAT ME’を持っている…」

ああ、食べるのはどっちのクッキーかしら!」

迷ったアリスはうんうん唸って、よし、と覚悟を決めました。

ぱくん!

するとみるみるうちにアリスは小さくなって、

「やったわ!」

扉をくぐることが出来たのです。

どちらのクッキーを食べたかですって?

それはクッキーのためにも内緒にしておきましょう。ね。

さあアリス、白ウサギを追いかけるべきや。

「でも、白ウサギを探す前に…くしゅんっ、体を乾かしたい…くしゅんっ」

びしょ濡れアリスは震えながらくしゃみをしました。

「くしゅんっ」

そうね、濡れたままじゃ風邪をひいちゃうわ。でも、どうやって体を乾かしたらいいのかしら。

今はほつといても暑い夏じゃないし、火をおこそうにも薪を集めなきゃ。

「乾燥機能付きランドリーがあつたりはしないわよね…」

それは望み薄ね。

とりあえず、アリスは少しでも体を暖めようと走ってみることにしました。

「少しでも白ウサギに追いつくかもしれないわ」

アリスが走っていると、遠くに何やら矢印が見えました。なにかしら。

近づくとそれは案内板のようです。こんなことが書かれていました。

「なみだ池はあちら」

「なみだ池？池はもういいわ。だって充分に濡れているもの！」

アリスはぶんっ顔を背けて矢印と逆方向に走ります。

「あちらになみだ池があるなら、こちらには何があるのかしら？」

アリスはこちらに向けて走ってしまったので、なみだ池でdryリースをしているドードーやねずみたちには会えなかったのです。残念ね。

さて、アリスが走っていく方向には何があるのかしら？

到着するまでにしばらくかかりそうだから、その間にお茶でもいかが？

アリス、3（芋虫とトカゲ）

はっとベスが気が付くと、目の前に空が広がっていました。

「…っあんつの、×××トカゲ！」

ベスは髪に絡まった枝葉をとりながら、とても教えてあげられない悪態をつきました。ベスったら！

「に、しても、随分と高いところに飛ばされたわ」

ベスがいたのはとても広い鳥の巣でした。ずいぶんと大きな鳥がいるものね、とお思いでしょう？

いいえ、お茶をすすめている間にこんなことがあつたんです。

アリスは走っても走ってもなかなか次の場所にたどり着かないので、そういえば自分が小さくなったことを思い出しました。

扉をくぐったのだし大きくなるべきだわ、そう思ったアリスは森の中で芋虫を探すことにしたのです。

「芋虫がきのこの場所を覚えてくれるのよ。大きくなれるきのこをね」

物語を覚えていたアリスは、芋虫のいそうな場所、つまり煙がのぼっているところを目指します。まあ実は物語を覚えていたというより、煙を見て芋虫の水たばこを思い出したのです。

アリスはすぐに煙の元に着きました。

ですが、なんてこと。アリスが着くのが一歩遅かったのでしょうか、

芋虫はすでにさなぎになっていました。

「ああ、芋虫さん、いえ、さなぎさん！あなたに訊きたいことがあるのよっ」

アリスが呼びかけると、さなぎは眠たげに答えました。

「Who are you?」

「I'm...」

そこまで言ってアリスは口ごもりました。

自分はアリスかしら？小さくなったアリスはアリスだったかしら？今の自分に相応しい名前にしなきゃ。

「My name is Beth・ベスよ」

「ベスとやらは何の用だい？」

ふわああ、と欠伸が聞こえました。ベスはさなぎが寝てしまわないうちに急いで尋ねます。

「大きくなるきのこはどこ？」

「…右に五個、左に三個」

さなぎの近くにきのこが群生してました。ベスはきのこの群れを見つけて、

「左から五個目、右から三個目ね。ありがとうっ」

ばたばた走ると、自分と同じくらいの大きさのきのこを数え、

「これね！」

手を伸ばして千切ると躊躇もせずぱくんつ、と食べました。

するとどうでしょう。

アリス、いえ（間違えてしまうわ、全く！）、ベスの体はみるみるうちに小さくなってしまったのです。

「ああ、何てこと！」

ベスは叫んだけれども、小さすぎて聞こえはしません。だって今のベスったら蟻ほどの大きさなんですもの！ベスはどこまで小さくなってしまいかと心配しましたけど、なんとか山蟻ほどの大きさでとまりました。

「…きのこを間違えて食べてしまったんだわ」

ベスは遥か高いところにあるきのこことようやく見えるさなぎの姿に眩きました。

「でも、胴がなくなっちゃったり、首が伸びるよりましだわ」

ベスは不思議の国のアリスの、あの挿し絵が嫌いでした。

「でも、どうやって戻ればいいのかしら？」

大きくなるきのこは反対側です。
たどり着けたとしても傘に手が届かないわ。

「だれか、そうだれかが通りがかればいいのに」

すると些かご都合主義だけれど、くしゃみが聞こえてきました。枯れ草を踏む足音もします。

「だれかしら…アリクイじゃないといいわ」

ベスの前に現れたのはトカゲでした。顔中すすだらけで、時折大きくくしゃみをしています。

「煙突掃除人のトカゲだわ！」

ベスは自分がここにいることを気づかせようと大きく両手を振りましたが、トカゲは全く気づきません。

「おーい、おーいったら！」

必死のベスはトカゲが目の前を通りすぎるのに、慌てて飛びつきました。なんとかトカゲの足に飛びついたベスは振り落とされないようにしがみつきます。

「ねえ、気づいてくれてもいいんじゃないかしらトカゲさん！」

ベスは叫びましたが、声が小さいのとトカゲがぶつぶつ何か言っているのとで聞こえていないみたい。

「…全く、あの白ウサギめ、毎度毎度煙突を詰まらせるんだから…」

そもそも冬毛になれば暖炉なんかいらんないじゃないか…」

ぶつぶつこんなことを言ってたんですけど、トカゲの言葉なんか全く聞いていないベスは（話を聞かないのはベスもベスね）トカゲの体をよじ登るのに必死でした。

「耳元で叫べば聞こえるわ」

そう思って体のざらざらしたつろこに手足を引っ掛けて登ります。でもベス、トカゲの耳ってどこにあるの？

「とりあえず、頭にたどり着けばあるはずよ。たいていこういう場合、頭のとっぺんか鼻筋よ」

やつのことで頭にたどり着いたベスは、トカゲに向かって叫びました。

「help me! 助けて!」

トカゲは鼻のあたりがむずむずしていました。煙突の中で灰が鼻に入ったのでしょうか？それでさっきから大きなくしゃみがでるのです。

「それもこれもあの白ウサギの…」

つて、ところでくしゃみが一つ。

鼻先にいたベスまで吹き飛ばしてしまったんです。吹き飛ばされたベスはくるくる回りながら、さらに風に煽られて上昇気流にのります。

「もうだめ！」

ベスは気を失いました。

それで目が覚めたら、鳥の巣の中だったんです。

と、いうことで。ベスは高い木の上の鳥の巣の中、背丈は蟻ほど。さてどうしましょう？

「…このままいても鳥に餌として食べられてしまうわ。蛇と間違われるよりいいけど…うん、食べられるのはイヤだわ食べるなら考えるけど、」

ベスはうんうん唸って、（時折トカゲに対する罵倒が入ったんですけどここでは言えません！）覚悟を決めました。

「えい！」

まあ！ベスはスカートを翻し、鳥の巣から飛び降りたんです。

ベスは風になり、飛んでいくように落ちていきました。

（なんだかこの国に来てから落ちっぱなしだわ）

ベスがそう思った途端、ばしゃん、と大きな音を立てて落ちました。

（そして濡れっぱなし！）

ぬるい水が体に纏わりつきます。ベスはばたばた手足を動かして、なんとか浮かぼうとしました。

けれども、どっちが水面かしら？どこへむかって泳げばいいの？

水は濁っていてまるでミルクティーの中にいるみたいです。上下左右もわからないベスは息が苦しくて苦しくて、水を飲み込んでしま

いました。

ごっくん！

するとどうでしょう。カップのひっくり返る音とソーサーがぶつかる音、いくつかの食器がひっくり返ったり割れる音がして…

ベスはテーブルの上に座っていました。

アリス、4（気狂いお茶会）

辺りに薰るのはミルクの匂いです。

「…はつくしゅんっ」

ベスはびしょ濡れの体をぶるつと震わせました。泉のときのように水じゃないだけかもしれませんが、と思いましたが、水色のエプロンドレスが濁った色になっているのと茶色と黒の縞縞になった靴下を見て、

「全くましじゃないわ！」

と悲鳴をあげました。ベスから滴るミルクティーがテーブルの白いクロスに染みていきます。回りにはティーカップとソーサー、ミルクポットやスプーンが散乱していました。唯一無事なのは砂糖壺くらいかしら。

「ミルクティーのカップ中に落ちたのね。そしてミルクティーを飲んだら大きくなったんだわ！」

ベスはドレスの裾を絞りながらぐると見渡します。ベスが乗っているまあるいテーブルにはイスが六脚、でも誰も座ってません。

「…誰もいなかったのはラッキーと見るべきね」

こんな姿を六人もの前に曝したくはないわ、とベスは呟きます。ベスのドレスから絞られたミルクティーはカップにちょうど二杯分、ありました。

テーブルの周りは木、木、木…その合間に扉が三つ。

なにかしら？

「アリスでティーカップといったら決まってるわ。気狂いお茶会よ、mad tea party! ならあれは帽子屋ね!」

ベスはテーブルから飛び降りると扉に向かって駆け出しました。

扉にはシルクハットをかたどったノッカーが付いています。ベスはノッカーを力いっぱい（それはとても重かったんです!）叩きました。

「…なんだい騒々しい、」

「初めまして帽子屋さん!」

ベスはドレスの裾を摘んでお辞儀をしようとして裾から滴るミルクティーに気づき、慌てて絞りました。

「ミルクティーの滴るお客さん、君はどなたかね。What your name?」

「My name is…」

そこでベスは思いました。小さなベスはこんなに大きくないし、ミルクティーが滴ってもいないわ。なら今のベスはベスじゃないんじゃないかしら？

「…Elsie、エルシーよ」

「初めましてエルシー、私は知っての通り帽子屋だ。初めてなのに

なぜ君が知っているのかは分からないがね。

エルシー、なぜそんなにミルクティーを滴らせているんだい？私の知る限りでは、ミルクティーの雨が降ったとは聞いていないなあ」

エルシーはぐつと言葉に詰まりました。トカゲのくしゃみに吹き飛ばされた、なんて言いたくなかったのです。それに、トカゲに会うまでも何だかとても長くて。

「どこから話せばいいのかが分からないわ。どこまで話せばいいのかも、」

「話しなど!」

帽子屋は両手を高く上げてエルシーを見ました。

「最初から始めて最後に来たら止めればいいのさ!」

「...そ、それはそうね」

エルシーはなるほどと頷きました。両手を上げた帽子屋は有無を言わず、というか反論を許さないように大きく見えます。

何だか威嚇されているみたいだわ、とエルシーは思いましたが賢明なことに口には出さずにいました。

「ミルクティーに濡れているのはティーカップに落ちたからよ。ティーカップに落ちたのは、鳥の巣から飛び降りたからで、鳥の巣には風に飛ばされたの。」

さなぎさんに教えられたきのこじゃ大きくなれなくて、逆に縮んでしまったから。

縮んだから扉を通れたんだけど、なかなか追いつけなくて、クツキ

「ちゃんはおいしかったけど。」

「そうよ白ウサギを追いかけて井戸を落ちたのよ!」

「そつよ、エルシー。白ウサギを追いかけなきゃ。」

「ねえ帽子屋さん、白ウサギを知りません? チョッキを着て懐中時計を持っているの、」

「時計? 時計だって! ? 時計のことならこの私に知らぬことはない。なぜなら私は帽子屋さんだから!」

「帽子屋さんですからですって? 帽子屋がどうして時計に詳しいの? 帽子のことならいざ知らず!」

「帽子屋さんだからに決まっているだろうが、エルシー!」

「エルシー、君、帽子屋に何が売っているとおもうのだね?」

「帽子に決まっているじゃない」

「何て妙なことを訊くのかしら、とエルシーは思いました。けれど帽子屋は扉を開け放ち、部屋の中をエルシーに見るように促したんです。」

「見たまえ、君、帽子屋は時計を売るもののさ、エルシー!」

「まあっ」

エルシーは言葉を失いました。それも当然です。帽子屋の部屋の中を埋め尽くすのは壁掛け時計、置き時計、柱時計、腕時計、時計、時計、時計：それらがみんな時を刻んでいるのですから！

「まるで時計屋敷だわ、」

エルシーは驚いてぼつりと呟きました。時計屋敷なんて見たことがないけれど、あるとしたらきつとこんなだろうと思ったんです。けれど、

「時計屋敷だと！？君、それはどこにあるのだ。私が知らない時計はあるはずがない！」

エルシーの言葉に反応した帽子屋はエルシーの両肩に手を置き、揺さぶります。エルシーは脳みそが十分シェイクされてからようやく帽子屋を引き剥がしました。

「こ、こんなに揺さぶられた、たら、言えることも言えない、わ…っ」

エルシーはくらくらする頭を抑えながらしゃがみ込みました。あんまり揺さぶられたのでミルクティーに濡れた服も乾いたほどです。

（喜ばしいことだけど喜べないわ！）

エルシーは揺さぶられて、気持ちが悪くなりました。そのまま揺さぶられていたら、気を失っていたことでしょう。

エルシーが意識を手放しかけたとき、帽子屋の時計という時計が一

斉に鳴り出さなかったら！

シリシリシリ

ピピピピピピ

ゴーンゴーン

パッポーパッポー

何ていう音量！時計それぞれが割れんばかりで時刻を告げているんです。

「……………！」

帽子屋が何かを言っつてエルシーを離しましたが、エルシーには聞こえてないみたい。当然ね！

ああ、それにしてもうるさいわ！

帽子屋、早くその音を停めて頂戴！

帽子屋は懐から懐中時計を出し、時刻を確認しています。どうしてわざわざ懐中時計を見るかですって？

それは時計たちがそれぞれ異なる時刻を指しているからです。どれが本当なのかわかりやしないわ。

と、音がぴたつとやみました。

エルシー、大丈夫？

（ま、まだ耳の中で鳴ってる感じ）

へたり込んだエルシーに、帽子屋が言います。

「何をしているんだ、お茶の時間じゃないか！」

帽子屋はエルシーを引っ張り立たせると、強い力で店の外に連れ出しました。

エルシーが歩かなくてもいいくらい、すごい力です。

「う、腕がもげちゃうわっ」

（それにお茶なんて！ミルクティーに落ちたばかりだから充分っ。）

「なんてことだ！ティーテーブルがぐちゃぐちゃだ！」

突然帽子屋は止まったものですから、エルシーはポイツと投げ出されちゃいました。まあ、丁度椅子の上だったからいいわね。

「支度をし直さねばならないではないか。エルシー、君、ヤマネの店に行つて来てくれ！」

帽子屋はそう言ってエルシーに唯一無事だった砂糖壺を渡しました。残った食器はテーブルクロスでくるんで、投げました。いくつか悲惨な音がしたけど、聞かなかったことにしましょうか。

「ヤマネ？ヤマネの店で何をするの？」

「エルシー、君は何も知らないな！ヤマネの店はティーカップ専門店だ。いれたての紅茶を六揃い、くれぐれも砂糖壺を忘れるな！」
帽子屋はエルシーに3つの扉のうちの1つを指差しました。

「急いでくれ、お茶の時間はもう過ぎているんだ！」

エルシーは砂糖壺を抱えて走りました。ティーテーブルをぐちゃぐちゃにしたのは自分だから少しはお手伝いしなくちゃ、と思ったんです。帽子屋が怖かったっていうのもありましたけど。

扉にはティーカップをかたどったロッカーが付いていました。エルシーはノックをしようとしたが、あら、取っ手がないわ。

「カップの口がくり貫かれてる…もしかして、」

と、エルシーは砂糖壺から角砂糖をひとつ、ティーカップにほおりこみました。ちりんちりん。
小さい鈴が鳴って、扉が薄く開きました。

「誰だい？」

「ヤマネさん、いれたての紅茶を六揃い、くださいな。帽子屋さんの言付けなの」

姿を見せたのはネズミのような、そんな感じです。

「砂糖壺をお出し」ヤマネはエルシーから砂糖壺を受け取ると、中をすっかり食べてしまいました。角砂糖をそんなに食べて、気持ち悪くないのかしら？

「お茶は間違いなく持っていくよ。あたしもお茶会に呼ばれているからね。帽子屋に今日は公爵夫妻がおいでになるから、ジャムの用意は出来ているか、確かめといっておくれ」

「ええ、でもヤマネさん、お茶会はもう始まっている時間だって帽

子屋さんが言っていたのよ。急いで持っていかなきゃ！」

「あやつが時間を間違えるのはいつものことさ。たくさんの時計のうちひとつも正しいのはありやしない、」

ああ、お茶をいれなきゃね、とヤマネは顔を引っ込めました。

エルシーは帽子屋の元へ戻ります。

「帽子屋さん、公爵夫妻がいらっしゃるのよ。　って、まあ！」

エルシーはテーブルに戻ってびっくり。テーブルに真っ白なシートがかかっているのはいいとして、並んでいるのは時計、時計、時計……椅子にも近くの木々にも時計がかかっているのです！

「帽子屋さん、お茶会のはずでしょう？　これでは時計の会だわ」

「そう、公爵夫妻が来るのだったな。エルシー、君、急いで時計屋に行ってきたくれ」

「時計屋ですって？　これ以上の時計はいらないわ、」

エルシーは眉をしかめました。

「君、エルシー、何を言っているのだ。時計屋に時計があるわけがなからう。時計は帽子屋が売るものだ」

「じゃあ何があるっていつの？」

「ジャムを売るのさ！」

当然のように言い切られ、エルシーは思いました。

（…帽子屋が時計を売り、時計屋がジャムを売る、有り得ないことじゃないわね。いいえ、現に有り得ているんだから！）

エルシーは帽子屋の機嫌を損ねないように、時計屋の元へ走りました。

（でも、大好きな帽子屋が嫌いになりそうだわ）

時計屋は3つの扉の1つ、店主は三月ウサギです。

「三月ウサギさん、ジャムをくださいな！」

エルシーは扉を叩いて（だってドアノッカーがついていなかったんです）大声で呼びました。
けれども返事はありません。

「三月ウサギさん、時計屋さん！いるのかいないのか返事をしてください！」

エルシーは本当に何度も叫びましたが、返事はありません。
留守みたいよ？

「そうね、」

エルシーは三月ウサギに会えなかったことをちよっぴり残念に思いながら、帽子屋のところへ戻りました。

けどね。

「いるならいると言って頂戴！」

帽子屋のティーテーブルには既に五人、座っていたんです。嬉しそうに時計をカップに浮かべている帽子屋、溢れんばかりの砂糖を入れ続けるヤマネ、それに沢山のジャムの瓶をポケットに入れているのが三月ウサギでしょう。

アリス、5（公爵夫妻）

あと、落ち着いた感じの青年と、エルシーより幼い少女がいます。
親子かしら？

「遅いわ。このあたしを待たせるなんて」

女の子が言いました。

「お待たせしたのは悪いけど、こちらにも理由があるのよ。帽子屋さんに言われたとおり時計屋さんに行っただけど、三月ウサギさんは留守だったのだから、」

「三月ウサギはあなたより先にここにいたわよ。それにこん気狂い帽子屋の言うことを真に受けるなんて！」

ねえ、と少女は隣の青年に同意を求めました。

「そうだね、マイ・ディア」

青年は微笑み、頷きました。

「しかもあなた、その格好はなんでしょ！ よっぱどミルクティーがお好きなのね。頭の先から足の先までミルクティー色だなんて！」

言われてエルシーは自分をじっくり見ました。エプロンドレスはもとより、靴下もリボンもカチューシャも、髪の毛すらミルクティーに染まっています。

無事なのは黒いエナメル靴と碧の瞳くらい。

「…こ、これにも色々事情があるのよ」

「ミルクティーに事情があたり？　ねえ、」

「そうだね、マイ・ディア」

「ミルクティーに染まるとあなたたちには関係ないわ！　何故知りもしない人にけなされなきゃいけないの？」

「知りもしないですって？　あたしたちを知らないそうよ、閣下、これは許されざることだわ」

「そうだね、マイ・ディア」

エルシーはかちん、と来ました。（表現が古いかしら？　まあいいわ）
だってこんな小さな女の子に責められるなんて！

「いいですか、レディ？」

レディと呼びかけたのもエルシーにしては上出来です。エルシーとしてはガールと呼びたいところですから。勿論、ベイベーと呼んでしまいたい気持ちも大きかったんですけど、そこはエルシーも思い止まります。

ですが。

「レディ？　レディですって？　お聞き及びでしょうか閣下！　このわたくしのことをレディと呼びましたわっ」

「マイ・ディア、確かに聞いたよ。失敬な、」

少女はエルシーがびっくりするくらいの剣幕で怒り出しました。

「ど、どうしたのよ？」

「どうしたもこうしたもあるものか、君、エルシー！君はこの方をレディと呼びなすった！」

「そうさね、マダムをレディと呼びなさるのは確かに失敬だと思うよ」

「マダム??」

帽子屋とヤマネに言われて、エルシーは思い当たりました。

「まさか、公爵夫人ですよ!？」

「わたくしが公爵夫人でなくて、誰が公爵夫人だとおっしゃいますの？」

「そうだね、マイ・ディア。君以外に僕の伴侶には成り得ない」

（随分と年の離れた夫婦だね。幼妻にも程がある…）

「…無礼をお許し下します？夫人。失礼なことに、その、公爵閣下と存じ上げず…公爵夫人とは知らなかったものですから、」

エルシーはできるだけ、低姿勢を心がけて少女、いえ、公爵夫人を伺いました。

「まあ！やはりわたくしをご存知ないとは！この国でわたくしを知らなかったと堂々と仰るなんて！

これは陛下の前にお連れすべきだわ！ねえ、閣下？」

「そうだね、マイ・ディア」

ですけど、まあ、こんなことを早口で畳みかける公爵夫人に腕を引かれて、エルシーは走らざるを得なくなりました。公爵夫人の速いこと速いこと！

「紅茶も頂いてないわ！せっかくの憧れの気狂いお茶会だったのに！」

エルシーは腕を引かれるまま、半分宙に浮かびながら公爵夫人のあとについていきます。

あら、三月ウサギったらまだ一言も話してないわ！今を逃すと出番がないけど、いいの？

……。

あら、寝ている。

しょうがないわね、たくさん登場人物がいるのだから、三月ウサギくらい飛ばしましょう。帽子屋はにたにたしながら時計入り紅茶を飲んでいるし、ヤマネは紅茶入り砂糖（としか言えないくらい砂糖たっぷりの紅茶だわ）を食べているし、私たちもエルシーを追わなくちゃ。

つて、公爵閣下、夫人と一緒にありませんの？

……。

反応がない。夫人以外とは話さない気かしら。それとも私が若くな

いから…いいえ、あの夫人と比べたら皆年上だわ。

とりあえず、エルシーを追いましょう。随分遠くへ行ってしまったけれど、追いつけるかしら？

追いつけなければこの物語が終わってしまうわ！

エルシー、エルシー？公爵夫人？

ああ、駄目、見失ってしまったわ。ねえ誰かいませんか。どなたかエルシーと公爵夫人を見かけてませんか？

何処に行ったのかしら。うーん、同じような森で判断がつかない。夫人は陛下の元へ、と仰ってたけど、陛下ってどちらにいらっしゃるのかしら。

せめてチエシヤ猫がいてくれたなら！こういうときにチエシヤ猫が出てきて案内してくれるのが定石でしょうに。

…しつ。……。ねえ、聞こえました？ええ、声がしたわ。こっち…ほら、泣き声のような…こっち、こっちの方向よ。この奥、そう、あの木の後ろ…

まあ、チエシヤ猫だわ！

言ってみるものね！

でもあなた、本当にチエシヤ猫なの？チエシヤ猫って耳まで裂けたくらい大きな口でにたにた笑ってる、生首だったわよね。女王陛下の不興を買って首をはねられた。ええ、首から下があるのはいいのよ。大変良いことだと思います。生首よりはね。生首は心臓によくないわ。

でも、このチエシヤ猫ったら笑っていないんです。ずーっと泣きっぱなし。

泣きっぱなしのチエシヤ猫なんて！

どうすればいいのかしら。ここはほおっておいて他の猫を探すべきかしら？

他の猫？あら、不思議の国に他の猫なんていたかしら…

鏡の国ならいたはずだけど。

やっぱり、このチェシャ猫しかないのね。…まだ泣いてる。なにがそんなに悲しいというの！

………

…無視？無視するのね？わかったわ、わかりましたとも！あなたなんか頼りません。女王陛下は自力で探すわ。

でも一体どちらに行ったらいいの？

同じような木々の中、いるのはチェシャ猫だけです。辺りもすっかり暗くなっています。

どうすればいいのか分からずにへたり込んでしまいました。

チェシャ猫はまだまだ泣き続けています。泣きたいのはこっちのほうだわ！

どれくらい経ったのでしょうか。ふと森を甲高い叫び声のような喇叭が鳴り響きました。

チェシャ猫でさえびっくりして泣き止んでいます。あれはなに？静かな森に足音がひとつ、ふたつ、と聞こえました。誰かいたわ、よかった！

…と思う間もなく、こんな声が耳に入っただんです。

「喇叭だ！」

「処刑の喇叭だ！」

「首が跳ぶぞ！」

首、という言葉聞いたとたんチエシャ猫が泣き出したものですから、その後の会話が聞き取れません。けれど、嫌な予感がしました。とりあえず、足音が向かうほうへ急ぎましょう！

向かった先は広場でした。生け垣がぐるりと真四角に囲み、各角に四つの切れ目があります。広場の中央にカウチがあり、カウチの真ん中に座っているのは……

まあ、アリス！

…ではなく、今は何だったかしら…ベス、リズ、エルシー…随分長いこと見失っていたから分からなくなってしまったわ。もう！

ええ、そうです。主人公の名前なんて何でもいいんです！

だからあれはアリス！

アリスが不機嫌な様子で座っていました。正確には座らされています。アリスの後ろには公爵夫人が立っていて、公爵夫人の後ろには公爵閣下が立っています。いつの間に。

公爵閣下は公爵夫人を抱きかかえ、その上からアリスの両肩を押さえつけているのです。

カウチの両脇にはフラミンゴを連れた兵士がアリスを睨んでいます。

一体どういう状況なの？

すると喇叭が高らかに鳴りました。広場に集まった人々、動物のほ
うが多いですけど、がざわめきます。

女王陛下のお出ましですって！

ようやくアリスらしくなってきたわ。物語は佳境に入ります。
多分、ね。

アリス、6（女王陛下と裁判）

期待を裏切らず女王陛下方のご登場です。

女王陛下、方？

四つ角からお一方ずつ、先導する兵士と侍女を従えて女王陛下が見えました。

薔薇の花束を抱えた侍女が付き従っているのは豊満な体をコルセットで明らかに絞り、やわらかな笑みを浮かべた女王陛下。赤のたっぷりとしたドレスは胸元を惜しげもなく見せています。なんて見事な赤の巻き毛なんでしょう！

一方、黒髪のゆるやかなウェーブヘアの女王陛下は首の詰まった露出の少ないドレス姿、濃い緑の布地に花飾りをつけています。従う侍女は大きな水瓶を二人がかりで抱えて大変そう。

他方、金髪を結い上げた女王陛下は沢山の宝石を散りばめた薄いレモン色のご衣装で、頭飾りも首飾りもすべてが輝き目が痛いほどです。侍女が宝石箱のような小箱を掲げています。

そしてあの女王陛下の色の白いこと！濃紺のドレスはスレンダーな体にぴったり合っています。髪は結い上げているのかしっかりと布地で縛り、剣を左手に持っています。従う侍女も戦装です。

「あなたが、エルシー？」

赤の女王陛下がカウチに座りながら問いかけました。

「さなぎにはベスと名乗ったそうですね」

緑の女王陛下がその隣。

「気狂いお茶会ではエルシーと名乗ったのでしょうか」

金の女王陛下がカウチの反対側の端に座ります。

「さて、お前の名は一体何だろうねえ」

青の女王陛下がアリスの隣に座りました。

（まるでハーレム！）

アリスは口には出さず感激しました。女王陛下を四人も侍らせるなんて、なかなか出来ませんから。

「My name…」

そこでアリスは口ごもります。果たして、今アリスはアリスかしら？

エルシーではないみたい。だってミルクティーに染まった服は女王陛下の前だからって取り替えさせられたもの。

ベスではないわ。小さくないもの。

エリザベスは思わず言っちゃいました。

「法廷って入ったことはないけど、…これは絶対に違つてでしょう！」

座っているというよりも既に首も固定され、押し付けられている状

態。エリザベスからは見えませんが頭上では刃物がぎりり、ってエリザベスがいるのは斬首刑台、ギロチン台です。

「刑の執行が先、判決が後、ですわ」

赤の女王陛下の声がしました。

「斬首がお嫌なら茨の冠を被つての鞭打ち刑が宜しくて？」

「…そんな痛そうなのは遠慮します！」

「ならば水瓶に顔を沈めましょうか」

緑の女王陛下が言いました。

「…そんな苦しいのは無理よ！」

「だったら、毒をあおる？」

金の女王陛下が言いました。

「そんな恐ろしいことできないわ！」

「だったら斬首しかなくろつ。心配せずともあつという間に終わる。おまえが判決を聞くまでもなくねえ、」

青の女王陛下が言いました。

「…ですから、何故首をはねられなければならないのですか!？」

「それは刑の執行の後、白ウサギが主文で告げる。審議はその後だ」

「それじゃ理由すらわかりませんわ！」

言うとおりでわエリザベス。

「理由などわからなくてよいのだよ。ここは不思議の国だから」

あ、と思ったときには青の女王陛下がギロチン台のロープを切り離し、刃は重力に従って真下へ落ちました。

すとな。

ごろごろ。

エリザベスの首はころろと転がって、一緒に切られた金髪をばらまきながら辺りを真っ赤に染めました。

ひよい、と拾い上げたのは白ウサギです。やっと会えたわね、エリザベス！

首の付け根からばたばた血が流れるものですから、白ウサギは着ているチョッキごと転々と赤くなっています。

さあ白ウサギ、エリザベスが首をはねられた理由を教えてくださいませんか？

「メアリー・アン、こんなところにいたのか」

白ウサギはそう言ってエリザベスの首をチョッキのポケットにしまおうとしましたが、大きくて入るわけがありません。そしてそれはエリザベスよ、メアリー・アンじゃないわ。

「閉廷、閉廷！被告人の刑は執行された！判決は斬首、告訴理由は

逃亡罪、被告人はメアリー・アン！」

白ウサギがそう叫ぶと喇叭が鳴り傍聴人と陪審員が退廷しました。四人の女王陛下と白ウサギだけが残ります。

「メアリー・アンは決まり通りクローケーの玉に！」

エリザベスの首はメアリー・アン、メアリー・アンはクローケーの玉になると決まっていたみたい。

決まりならしょうがないわね。

白ウサギの言葉に女王陛下はクローケーは久しぶりだ、と喜びます。

「ではすぐに準備をいたしますので」

と白ウサギがメアリー・アンを連れて去り、女王陛下も始末を兵士たちに任せてクローケーの用意に城に戻ります。

法廷にはだれもいなくなりました。残ったのはメアリー・アンの首を持っていかれたエリザベスの体だけ。

物語はどうなるのかですって？

主人公がいなくなった物語はそこでおしまい、それが決まりでしょう。

主人公の名前はなんでもいいですけど、主人公は生きていなくちゃ、白ウサギを追いかけてられないでしょう？

ではこの物語はこれでおしまい。

白雪の人形姫、1（二人の姫）

妃は望んだ。

雪のように白い肌、
炭のように黒い髪、
海のように碧い眼、
血のように赤い唇を持つ娘が欲しいと。

望みは叶えられ、妃の元に女の双子が授けられた。

白雪の肌、
漆黒の髪、
緑柱石の瞳、
血の唇を持つ赤児と
象牙の肌、
栗毛の髪、
闇の瞳、
桜の唇を持つ赤児。

妃は自らが望んだ通りの娘を可愛がり、真綿で包むように育てた。

双子の姫はすくすくと育ち、年頃になる。後継王となる王太子は既に王の片腕として即位しており、姫たちはそれぞれ主要な家臣と燐国の皇帝の元へ嫁ぐことになる。

白雪の人形姫、2（桜の姫と狩人）

国王の妃は生まれながらに体の弱く、病でもないのに床に付いてい
ることが多かったという。

国王には何人かの寵愛する女がいたが、家柄の良さのため又後盾の
強さのために第一妃として王の後宮にいた。

妃の懐妊を知った王は同時にそれが妃の命と引き換えであるとも告
げられた。

それでも、と望んだのは妃である。

妃は自身の立場のために子を望んでいたが、既に王の他妃のもとに
王子はおり、後継として申し分のない身分と器量であった。

国を乱すことを好まない妃は姫の誕生を望む。

妃を慕うものたちは最後だと思われた妃の願いを叶えようとする。

腹の中にいる児が妃の望むように産まれるとは限らない。家臣たち
は思考した挙句、妃の望む姫をあつらえた。

それ、は漆黒の髪、血の唇を持つ陶器で作られた赤児であった。

妃は娘を一人産んだが、姫は双子として妃の元へ抱かれた。

白雪の肌、漆黒の髪、緑柱石の瞳、血の唇を持つ赤児と、象牙の肌、
栗毛の髪、闇の瞳、桜の唇を持つ赤児である。

妃は白雪の肌を持つ赤児を可愛がり、桜の唇を持つ赤児には興味を示さなかった。

双子の姫はそれぞれ、白雪の姫に桜の姫と呼ばれた。

白雪の姫は成長に伴い何度かあつらえられ、桜の姫は順調に娘になった。

白雪の姫の美しさは人にはみえないほどであったが、桜の姫は人並みであった。子を産んで後亡くなると思われた妃は、白雪の姫のために生き長らえた。体も強くなり、姫たちの年頃には他妃たちと同じように生活できるまでになった。

だからこそ王も他妃も家臣たちも白雪の姫を知りながら、白雪の姫をあつらえ続けたのである。

双子の姫は育ち、年頃になった。その頃隣国皇太子からの縁談があり、身分も家柄も人格も申し分のない桜の姫が輿入れることになった。同時に白雪の姫は主要な家臣の一人が貰い受けることになる。

白雪の姫の結婚式が桜の姫の最後の演技となった。

桜の姫はいつもの如く漆黒に髪を染め、白雪の面を被った。婚礼の衣装を身に着けていると、白雪の姫の伴侶となる家臣、狩人と呼ばれるものが訪れ、本当にそれでよいのかと尋ねた。

白雪の姫となった桜の姫は、貴方こそ本当にそれでよいの、と聞き返す。

二人は幼少の頃より慕い合った仲だった。

私は貴女さまのお側に仕えることは叶いませんが、ならば貴女さまのお力になれば、と狩人は言う。

わたくしは貴方と添い遂げることは叶いません、ならば形だけでも貴方に嫁ぎたい、

と桜の姫が言う。

かくして、白雪の姫と狩人の結婚式は執り行われ、それは身内だけの簡素なものだったが妃は満面の笑みとともに幸せな二人を送り出した。

その数日後、桜の姫の輿入れがあった。隣国の皇帝より贈られた品々に身を包み、国境まで迎えに出た皇太子とともに皇帝の元へ上った。半年後、皇帝は退位し皇太子が新帝に起った。

そのとき桜の姫は懐妊していたという。

白雪の人形姫、3（妃と鏡）

白雪の姫の結婚式の晩、ことほぎの宴で妃に貢ぎ物をしたものがある。

それは美しい装飾をした鏡だった。

しかしそれほど重くなく、片手で持つ柄が付いている。

妃は白雪の姫へではなく何故わたくしに贈るのか、と鏡を差し出すものに尋ねたが、そのものは姫様と別れるあなた様のために作った特別の鏡なのです、と言う。

この鏡は是か否かの質問に答えることができるのです、と言うので妃は簡単な質問を試してみる。

わたくしは娘がいる、と尋ねると鏡は低い声で是、と答えた。

わたくしの娘は嫁いだ。

…是。

妃は鏡を受けとり、贈るものに褒美を与えた。白雪の姫は婚礼の翌日、狩人の新任地となる国境の街に住まいを移したとされる。新帝に嫁いだ桜の姫は桜后と呼ばれていた。

桜后の懐妊の知らせは王国にも伝わり、狩人の耳にも入った。

桜后は初産であることから故郷での出産を望み、新帝に願い出る。

産まれる子が男御子であればわたくしの生まれた国を訪れることもないでしょうし父や母に会うこともないでしょうから、

という桜后に新帝は泣く。

新帝は桜后を寵愛していたので手放したくはなかった。

王都に戻りたいとは申しません、

国境に昔側仕えをしていた家臣の治める街があります、

わたくしの乳母もその街に住むと聞いています、

その街で産むことは叶いませんでしょうか、

という桜后の懇願に新帝は負け出産のための数月の滞在を許した。

桜后は輿に乗り大層な従者とともに国境へ着いた。

そして数十の侍女を連れて狩人の治める街に入った。妃は鏡に問い掛ける。鏡よ鏡、わたくしの娘は健やかか、と。

鏡は答える。是、と。

鏡よ鏡、わたくしの娘は不自由してないか。是。

鏡よ鏡、わたくしの娘は夫に憎まれているか。否。

鏡よ鏡、わたくしの娘は夫に愛されているか。是。

日に幾度か問答が続く、あるとき妃は問い掛けた。鏡よ鏡、わたくしの娘は子を授かったか、と。

鏡は答える。是、と。

妃は喜び急いで使いを出す。近々そちらへ伺おうと思っていると。

狩人が桜后の帰郷の知らせを受けたのは、妃からの使いがくる前日だった。

桜后を出迎えた狩人はどこか浮かぬ顔をしていた。

すぐに皇后歓迎の宴が用意されたが、狩人の表情に気付いた桜后は長旅の疲れを理由にそれを辞退した。

用意された自室に引き上げた桜后は狩人を呼び近しいもの以外を人

払いし、狩人に問い掛ける。

狩人は妃が白雪の姫を訪ねて来ることを打ち明け、白雪の姫が懐妊したと思っていることを告げた。

ばかな。

白雪の姫が懐妊なぞ有り得ないでしょう、と桜后が言う。

狩人は妃がどこぞのものから鏡を手に入れたことを話す。

白雪の姫の真実が知れてしまう可能性も。

桜后はひとつ溜め息をつき、ではわたくしが白雪の姫として母様をお迎え致しましょう、と言う。

狩人はそれでは皇帝の御子を私の子と謀ることになります、と言うが桜后の言葉を聞き二の句が継げなくなる。

そのとき狩人に溢れた感情は畏怖と歓喜だった。

桜の姫は言った。

わたくしの子は、新帝の御子なのか貴方の子なのか、判らないのです、と。

白雪の人形姫、4（七の職人たち）

七の職人がいた。

匠たちはそれぞれ白雪の顔を作るもの、

髪を作るもの、

胴を作るもの、

腕を作るもの、

脚を作るもの、

衣装を縫うもの、

化粧をするものだった。

桜の姫は七の職人に白雪の姫へと繕ってもらう。面を焼き、白雪の肌へと化粧がされた。ふくよかな腹を締め付けない衣装が縫われ、桜の姫を型に懷妊中の白雪の姫の体が作られた。

桜の姫は狩人と寄り添い、妃を迎えた。何故身籠もったことを早く伝えないのだという妃に、狩人は恐縮しながら答える。白雪の姫は淑やかで、懷妊を告げることが恥じらっておられたのです。夫である私にすら。鏡との問答で子が産まれたことを知った妃は王都まで来るように白雪の姫に使いを出す。

桜后は未だ狩人の元に滞在していたが、狩人は理由を付けて断った。桜后の御子は桜后に似た象牙の肌をしており、白雪の肌には似ていなかった。

妃はそれでも子どもが産まれた証が見たいと思い、臍の緒を送るように命じた。

桜后は産まれた男御子の臍の緒を小箱に入れ、妃の元に送った。

臍の緒を受け取った妃は鏡に問う。

鏡よ鏡、これは娘の子の臍の緒か。

鏡は答える。

…是。

しばらくはそれで満足していた妃は再び御子に会いたくなる。

白雪の姫の元へ使いを出したが答えは同じだった。ならば、と妃は御子の最初の髪をくれるよう命じる。

桜后は御子の髪を剃り、小箱に入れて妃の元へ届けた。

妃は鏡に問う。

鏡よ鏡、これは娘の子の髪か。

鏡は答える。

…是。

髪を手に入れた妃はしばらくはそれで満足していたが、より一層赤子を見たくなる。再三の使いが出され、とうとう狩人は赤子は死んだ、と返答した。

返答の使いを帰してからすぐに妃から新たな使いが来た。使者は言う。

ならば赤子の遺骸を届けよ、と。

狩人は思案し、七の職人に白雪の姫に似た男御子をあつらえさせる。桜后は男御子を連れ新帝の元へ戻る。

送り届けられた白雪の姫の子の遺骸を手にした妃は、鏡に問う。

鏡よ鏡、これは娘の子の遺骸か。

鏡は答える。

…否。

鏡の答えを聞いた妃は抱いていた遺骸を落としてしまう。ぱきいんと澄んだ音がして布に包まれていた白雪の子は壊れた。顔や体の破片が散らばり、妃は呆然と両の手を見た。

…鏡よ鏡、わたくしの娘の子は狩人の元にいるのか。

…否。

急ぎ狩人の街へ向かった妃は出迎える狩人に白雪の姫を出すようにと命じた。

狩人は妃の様子から替わり身が露見したことを知り、白雪の姫を抱き連れて来る。

椅子に座らせられた白雪の姫を見て妃は問う。

これは本当にわたくしの娘か。

白雪の姫でございます、と狩人が申し上げようとしたとき知らぬ声がそれを遮った。

…否。

やはり身代わりか、と呟く妃を見て妃が鏡を連れていたことを知る。

わたくしの娘はどこにいるのだ。

この方が白雪の姫でございます。

わたくしの娘の子はどこにいるのだ。

白雪の子はどこにもおりませぬ。

問答は繰り返され、妃は狩人を叱責した。狩人は観念してならば鏡にこの方が白雪の姫かをお尋ね下さいませ、と言う。

鏡は答える。

…是。妃は崩れるように白雪の姫の残骸を抱き締める。

白雪の人形姫、5（嘘と真実）

では動き語りわたくしに笑いかけた白雪はいつたい誰だというのだ。

狩人は言う。

桜の姫でございます。

桜の姫。

その名に覚えがあつたが、桜の姫を抱き締めたり語りかけたりした覚えはなかった。

妃は問う。

鏡よ鏡、わたくしの娘というのは桜の姫か。

鏡は答える。

…是。

桜の姫はどこにいるのだ、その問いに答えたのは鏡ではなく狩人だった。

桜の姫は、いまは新帝の后、桜后にとおなりです。

ではあの腹の子は新帝の御子か。

はい、という声と否、という声が重なった。

狩人の驚愕した顔を見、妃は悟る。

…そうか、あれはそなたの子か。

感慨深げに呟く妃は白雪の破片をひとつひとつ集め、衣装にくるみ

眩いた。

…白雪の姫は、わたくしに似て体が弱かった。

狩人たちが注意するなか、妃はしゃんと背を伸ばし朗々と言った。

白雪が子もろともに亡くなったのは惜しいこと。

しかしそなたたちに慈され、さぞ幸せだったろう。

礼を言う。

城に戻った妃は、白雪の姫と白雪の御子の残骸を並べ埋めた。二人の墓を見ながら妃は問う。

鏡よ鏡、王はわたくしを愛してくれているか。

…是。

鏡よ鏡、家臣はわたくしに恨みないか。

…是。

鏡よ鏡、狩人は娘を愛してくれているか。

…是。

鏡よ鏡、娘は狩人を愛していたか。

…是。

鏡よ鏡、桜の姫は皇帝に愛されているか。

…是。

鏡よ鏡、桜后は帝国に愛されているか。

…是。

問答の後、妃は鏡を割った。そして破片を細かく砕き、海に流した。それからしばらくして妃は病床に着く。臨終のとき妃は形見分けのように自分のものを惜しみ無く家臣たちに与える。妃は問いを残して死ぬがそれに答えるものはない。

…鏡よ鏡、桜の姫はいま幸せか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7124d/>

幻想童話

2010年10月16日00時06分発行